
午後の陽だまり

華乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午後の陽だまり

【Nコード】

N05960

【作者名】

華乃

【あらすじ】

ムーンライトノベルズで書いている「雨の夜」の番外編（5話完結）です。
本編の主人公の元カレ、津村真つむらまことから見た、主に過去のお話になります。

単独のお話としてもそれなりにお楽しみいただけれると思います。

本編はR18指定ですが、この番外編は全年齢向けです。

01・光の降る場所

僕 つむらまこと 津村真 は、わりと何でも器用にそつなくこなせるタイプの人間で、何かとても苦手なことがあった記憶はないし、特別やりづらいと感じる相手もいなかった。

大学の専門課程で同じゼミになった三嶋祐斗 みしまゆうと は、きっと僕と同じようなタイプなんだろうと思った。彼も何でも器用にこなすタイプだし、女に不自由しない容姿に恵まれていたし。

彼にあつて僕にないものがあるとしたら、それは 。

就職してから数年が経ち、学生時代の友達とはすっかり没交渉になつていた。年に何度か消息確認のようなメールのやり取りはあつたが、実際に会うことはなかった。

毎日が新鮮で忙しかったし、仕事は文句なく楽しかった。

学生時代から付き合つていた同い年の彼女は、一足先に短大を出て就職しており、学生だった僕にはずっと大人びて見えた。付き合い始めたころは、きっと彼女のそういうところに魅力を感じていただろう。

しかし、僕が就職すると物理的にも精神的にも本格的にすれ違い始め、いつしか僕は彼女のことを煩わしく感じるようにさえなつていた。

嫌いになつたわけではなかったのだが、疲れているときに甘えられると、どうしても溜息が出て仕方がなかった。以前はかわいいと思えた軽いやきもちさえ、鬱陶しかった。

程なく、僕たちは別れた。彼女は最後まで別れることを拒んだ。かなり長く付き合っていた相手だった。だが、一度すれ違ったものがふたたび交わるなんて、よほどのことでもない限り無理だ。僕は彼女ともう一度交わりたい、そのための努力をしたいと思えなくなっていた。僕は、優柔不断なわりに頑固なところもあって、一度こうと決めたら切り替えがかなり早いのだ。

彼女を深く傷つけた。後で大きなしっぺ返しが来るとも知らずに。

それから一年が経った。

その年の新入行員は新卒の女性がひとり、一般職での採用だった。名前は兩宮ちひろ（あめみやちひろ）。まだまだ卒業前で学生然とした彼女は、着なれない紺色のリクルートスーツと普段は履かないのだろう黒のパンプスで、僕の目の前に現れた。

朝礼の際に支店長から紹介を受けている彼女は、まるできらきらと光が降ってきたようだった。となりに立っている支店長には、もちろんそのきらきらした光なんて降ってやしない。でも、僕にはそのきらきらが見えるのだ。

僕は思った。これが一目惚れというやつなのだ。

幸いにも僕は、思春期以降付き合う相手には困ったことがなかった。挫折らしい挫折も味わったことがなかった。

でも、彼女はそう簡単な相手じゃなかった。僕は二ヶ月後、はじめての挫折を知る。

02・泣き腫らした目で笑う

ちひろは特別美人というわけではなかったが、不思議な魅力のある女の子だった。鋭いかと思うと鈍感で、穏やかだと思えば頑なだった。一筋縄でいく簡単な相手じゃない。

僕はそれまで、女の子というのは優しくすればするほど気分がよくなって、勝手に好意を持ってくれるものだと思い込んでいた。

もちろん、今はそうじゃないと知っている。ただ、その当時は連戦連勝、挫折知らずで嫌みな男だったのだ。そんな僕を彼女が本気で相手にするわけがなかった。

現金を実際に扱うとあって、新人であるちひろはなかなか実務を教えてもらうところまで達していなかった。五月になっても、ほとんど影響のない業務をおざなりに教えてもらう日々が続いているらしい、と彼女より少し先輩の女子行員が教えてくれた。こういうときは、この僕の八方美人ぶりがひどく役に立つのだ。

彼女は真面目だ。そして常に一所懸命だ。何をもおろそかにしない。小さなメモひとつに至っても、彼女は手を抜いたりしない。

僕は渉外行員なので当然外出が多い。その日は外出が長引いたので昼飯もろくに取れなかった。仕方なく、昼休みもとうに過ぎた時間にコンビニで買った余りものの弁当を支店の休憩室で食べることにした。

休憩室には先客がいた。彼女だ。

渉外行員と新人の女子行員が話をする場面は意外とない。僕が目敏くそういう場面を見つけて話しかけなければ、彼女のほうから話しかけてくることはまずないと言っていい。ただ、そのときはちょっと躊躇した。

彼女は泣いた後のように目を腫らしていたから。

「……お疲れ様。今お昼なんだ。何かあったの？」

「あ、津村さんお疲れさまです。わたしが仕事がろくにできないものだから、先輩に迷惑かけてしまつて、それで……」

彼女の教育担当の女子行員は言葉がきつい。悪気はないんだろうが、新人の彼女につらく当たっているのを何度も見ている。きつと今回もそうなんだろう。

普段何を言われても我慢強いと思われる彼女が涙を見せるってことは 余程のことだ。

「彼女、ろくに仕事を教えてもないのに、随分つらく当たるんだね」

僕は思っている通りのことを口にした。ところが、彼女はみるみるうちに顔を赤くして敢然と僕に反論した。

「先輩が悪いんじゃないやありません。わたしがもつと仕事ができるようになれば、先輩だって嫌なことを言わずに済みます。いわれのないことで先輩を貶めるなんて、いくら津村さんでもひどすぎます」

僕はあっけにとられた。まさか、こうくるとは予想していなかったのだ。

女の子というものはすべからく優しさに弱く、その優しくしてくれる相手に好意を持つのだという僕の経験則はもろくも崩れ去った。兩宮ちひろという人間は不可解だ。

それはある意味においてはひとつの挫折だった。世の中には僕の

知らない世界がまだあったのだと。

そんな大げさなことを考えていたわけではないが、しばらく固まっていたのは確かなようで、言葉を継げない僕を彼女は泣き腫らした目で笑った。

03・恋でしようか

六月は僕にとって呪われた季節だ。なにしろ僕は雨が嫌いで、梅雨となれば引きこもっていたと思うほどののだ。

しかし、根が真面目な僕はそんなことくらいで仕事をさぼったりはしない。足元が悪かろうと、蒸して暑かろうとも、いそいそと得意先巡りだ。銀行員は脚で稼いでなんぼというのが先輩から教わった唯一のことで、確かに僕もそれは一理あると思っていた。

彼女が雨の日好きだと知ったのは、六月も終わろうとするころだった。ノー残業デーなるありがたいもののおかげで、僕は残業せずに仕事を定時で終わるよう脅迫されて支店を出た。

ちようどちひろも退社するところだった。運悪く、僕の嫌いな雨がざあざあとこれでもかと降っていて、その日は梅雨寒だったから濡れると冷たい。その上冷房のきいた電車に揺られるのだからたまらない。とそこまで考えたところで、彼女に声をかけた。

「駅まで一緒に行こうか」

彼女は恥ずかしそうにくくりとうなずいた。別に僕に気があるわけじゃない。彼女は誰の前でも恥ずかしがり屋なのだ。そこを危うく勘違いしそうになった過去が僕にも既にあるので、念のため言うておくのだが。

彼女は水色の傘に紺色のレインブーツを履いていた。聞けば雨が好きなのだと言う。雨宮だから雨が好きなのかと聞けば、声を立てて笑った。

新宿駅に着くと、大げさではあるが、僕たちは別れなければいけない。僕はJRだし、彼女は京王線だ。一緒に電車で帰るという幸

運はそう簡単には起きない。

ところが、その幸運（に近い何か）が目の前に転がっていた。強く降る雨のせいで、電車があちこちで止まっているというのだ。神様がいるとすれば、熱いキスを捧げたいくらいの気持ちになった。

僕はすぐさま彼女を食事に誘った。どうせ電車が止まっているんだからご飯でも食べて帰ろうか、なんて気楽な体で。

作戦は成功だ。彼女は警戒心を一時的にといてくれたのか、そうですねとっこり笑ってくれたのだ。挫折を人一倍強く受け止めていたから、たったそれだけのことがうれしくて仕方なかった。

駅ビルのレストラン街は僕たちと同じような客がずらずらと列をなしていた。彼女は気にしないようなのでそのまま列に並ぶ。こういうときは気楽なイタリアンに限るとというのが僕の持論だ。

特に話すこともないらしく、僕が質問して彼女が答える一問一答のような会話になっていたのだが、しばらくすると空いた席に案内された。

味は悪くない。値段相応、いやちと高いかなと思わなくもないが、立地条件も含めれば概ね満足だ。彼女もおいしそうに頬張っていた。

「あのさ、ちょっと相談というか、聞いてもらいたいことがあるんだけど」

彼女は僕と目が合うと八割方目をそらす。今回もそらされた。そしてうつむいたまま「はい」と答える。

それは照れているだけなのだと知ってはいても、彼女を思う気持ちには期待に胸膨らんでしまう。

「僕の友達がね、どうも気になる女の子がいるらしいんだけどさ」

友達の話をしようとしているわけではないのと言うまでもない。

「その子としゃべって目が合うみたいだし、話しかけると楽しそうによく笑ってくれるし。ふたりきりで食事に誘ったらOKしてくれたみたいんだけど、それって彼女はどう思ってるんだと思う？」

「えっ、あー、そうですね…」

ちひろは少し考えてから答える。彼女はとても慎重派なので、軽々しい答えを出したりはしないだろう。ただ、いつもこういうパターンだと予想の裏をかいてくるから（いや、彼女にそのつもりはきつとないんだろうが）油断ならない。

僕は普段ろくにしない緊張の面持ちで、彼女の答えを待った。

「恋でしょうか…たぶん、彼女は彼に恋してると思います」

僕はまたしてもあっけにとられた。彼女から恋という単語が出てくるとは思っていなかったのだ。「は？」という声が出なかっただけでした。もし出てたら、彼女の次の言葉は聞けなかったのだから。

「ええと、わたしが思うには…ですけども。あの…異性の友達がたくさんいる人とかだとわかりませんが、わたしだったら…好きかな人でなければ、きつとふたりきりで食事なんて無理だと思います…」

彼女はそう言って少し頬を赤らめてうつむいた。

これは普通誤解するよ。僕だって、相手がちひろじゃなければ速攻で次の手段を取る。

ただ、相手はちひろだ。このパターンで何度か肩透かしも食らってきた。だが。

これは期待してもいいということなのか？

天然で告白されていると感じるのは僕の勘違いじゃないのか？

…などと自分に問いかけながら、僕は今後の計画を頭の中で練りに練っていた。

04・君を抱き締めたい

梅雨明け宣言なるものがどうかは知らないが、とりあえず梅雨は明けたらしいぞと感覚的に感じられるようになった七月下旬、海の日を入れた三連休が僕たちのはじめての旅行だ。

もちろんふたりきり、なわけがない。支店の皆で親睦を深めましよう、てなわけで、慰労も兼ねての社員旅行だ。

それでも僕は浮かれていた。なにしろ（ふたりきりじゃないけど）彼女と旅行なのだから。

まず、僕の考えた計画を紹介しよう。

今回の社員旅行、行き先は箱根だ。泊まる旅館は決まってはいるが、あとはかなり自由な時間だ。宴会にさえ間に合えば、普通の旅行とさほど変わりもない。

まずは彼女ともうひとり（あの、僕に情報を流してくれる協力的な女子行員がいいだろう）を誘い、こちら僕ともうひとり適当な男（こちらは彼女と別れたばかりの傷心の後輩がいいだろう）を誘って一緒に出かける。彼女をどうやって誘い出すかというのが一番の難関だ。なにしろ相手は警戒心の塊のような女の子なのだから。

なんとなく歩いているうちに、他のふたりとはぐれて僕たちはふたりきりになる。この、なんとなくふたりきりになるといふのはそれなりに難関だが、正直僕はこういうことはかなり得意なほうなので心配していない。

問題は、彼女の気持ちだけだ。こればかりはどうしようもない。

おそろしいほどに計画はうまくいった。誘ったもうひとりどうしがなんとなくいい雰囲気になってくれるところまでは考えていなか

ったのだが、棚から勝手に僕の手のひらに落ちてきたばたもちを食
べずに取っておくほど僕はお人よしじゃない。

かくして、あとは当人どうしの気持ち（どうせこちら側は端から
決まっている）次第。

ふたりをそつとしておこうなどと心にもないことを言っつて、彼女
を散歩に誘う。

「あの、先輩たち、どうしたでしょうか」

あくまでも偶然ふたりきりになってしまったと彼女は思いこんで
いる。

「ふたり、前からいいなと思っていたみたいだよ。うまくいくとい
いね」

僕はそこでとびきりの笑顔をつくった。これでかなりの女性を落
としたのだが、うつむいた彼女はまるで気づかない。

ここは単刀直入にいかがか。

「それより、雨宮さんは僕のことどう思ってる？」

彼女はぱつと顔を上げて足を止めた。言われて驚いた、みたいな
顔をしている。目が合うと顔が赤く染まる。かわいい。やっぱり好
きだ。

「僕は雨宮さんのことが最初からずっと好きなんだけど、君はどう
思ってるのか知りたいんだ」

計画も企みもない。直球も直球。ど真ん中、ストレートだ。打っ
てくれと言わんばかりの。

「……は、はい。わたしも、津村さんのこと、好きです。好きになっちゃいました……」

「こうなると、やることはひとつしかないんだけど、彼女相手に許されるかどうか。」

「君を抱き締めたいんだけど、いいかな？」

そして僕は、彼女が答える前に彼女を強く抱き締めた。

05・暇にキス(前書き)

最終話です。

05・瞼にキス

果たして僕とちひろは付き合うことになった。徹底して恥ずかしがり屋の彼女は、僕にキスひとつ許さない聖女ぶりで、じれじれしながらはじめてのデートを迎えた。

なにしろ、僕が今まで女の子たちに対して意図的にやってきたことのほとんどすべてを、彼女にはことごとく否定され続けてきたのだ。

いや、彼女が明確に否定したわけではなく、それは結果的にそうなったのであつて。さらに言えば、彼女の、かわいいだけじゃない天然のずれっぷりによるものでもあるのだが。

とにかく、僕がこれまで当然得られると思っていた結果は、彼女が僕のが好きだったこと以外、常に裏切られている。ありきたりな優しさすら彼女には通用しない。

はじめてのデートは武蔵野市にある、あの広い公園だ。あそこに祀られている弁天様は女の神様で、彼女の嫉妬により、デートすると別れるというジンクスなら僕も知っている。

ジンクスは非科学的なものであるからこそ信じるに足ると僕は思っている。思い込みこそがすべてだ。恋は勘違いのなせる技だ。学生時代に、友人の（三嶋）祐斗にそれを話したら大激論になったことがある。

奴はジンクスなんていう非科学的なものは信びよう性のかけらもなく、信じるに値しないときっぱり言い切るのだ。無論僕は黙っていない。祐斗がその話にこだわっていないのはわかっていたが、しつこく反論した。

僕は、男のくせに妙に夢見がちだ。だから女の子の気持ちかわかるし、優しくもできる。祐斗はまるで正反対で、あいつの辞書には優しく声をかけるとい言葉が載っていないんだらう。生かせそうな外見を最大限生かせばいいのにといつも思っていたのだが。

閑話休題。ちひろとののはじめてのデートの話だ。それは薄曇りの土曜日の午後だった。公園は彼女の希望で、吉祥寺にはよく行くのだと話してくれた。

彼女と待ち合わせた公園口から外に出る。手を取ると、彼女は一瞬间驚いて、僕が見つめるとみるみる赤くなる。イマドキ中学生だつてこの反応はないだろうと冷静に考える自分もいる。彼女のことをよく知らなければ、計算か何かなのかと訝しんでしまうほどだ。それでも拒否されないのをいいことに、しっかり指を絡めて手を繋いだ。

ふたりで並んで歩こうとすると、彼女の歩幅は小柄なせいで僕よりはるかに狭い。自然合わせるのだが、歩みはかなりゆっくりになる。公園まではかなり時間がかかりそうだ。

しかし、デートとはそういうものだ。とにかく僕は彼女と一分でも一秒でも長く一緒にいたい、目的（公園）なんて実はどうでもいいのだ。

そのどうでもよかつた目的の公園に着くと、既にたくさんの人でにぎわっている。僕たちは途中で買った飲みものを手に、池の外周をゆっくりと歩いた。心なしか彼女は緊張気味だ。僕は彼女の緊張をほぐそうと、学生時代の笑い話をした。

ベンチのほとんどは既に先客があり、ゆっくり座って話をすることも難しそうだったのだが、偶然ベンチを離れるカップルを目撃した僕は、すかさず彼女の手を引いてそのベンチに腰掛けた。これでゆっくり話せそうだ。

相変わらず彼女は緊張気味だった。ネタに困らない学生時代の話を面白おかしく話して聞かせるのだが、彼女は相槌もそこそこいんどん顔をこわばらせていく。緊張からか、瞼が赤い。

「どうした？大丈夫？」

「は、はい。なんか緊張しちゃって…」

必死に笑おうとする姿が愛しくなって、彼女の白くてやわらかな頬に触れ、思わずその瞼にキスをしてしまった。

「ごめんね。かわいくてつい」

彼女はこれ以上ないくらい真っ赤になったが、うつむかず、瞳を潤ませて僕を見つめている。これで何もしないなんて男じゃない。

僕は彼女の唇にキスをした。唇が触れるだけのキスだ。チュツと音がして唇が離れると、彼女は閉じていた瞼を開いた。彼女の目は無垢な赤ちゃんのように濁りがなかった。

ちひろではなく元カノ、もとい妻を選んだことを僕は後悔していない。妻に対しては子供に対しても、きちんと愛情を持っている。今、僕が大切にしているのは彼女らだ。

確かに僕は今でもちひろを妻子とは違うところで愛しているが、その気持ちを誰にも言うつもりはないし、理解してもらおうとも思わないし、墓場まで持っていくつもりだ。

ちひろは僕にとっては今でも特別な女の子で、それは誰にもとって替われない場所にある。彼女を泣かせ、手酷く傷つけてもなお、

彼女のあのときの透き通るように潤んだ目を忘れることができない。きつとずっと忘れることなんてできないのだろう。

祐斗にあつて僕にないものがあるとするれば、それはちひろだ。彼らが付き合うことになったとき、律儀にも彼は僕に連絡をしてきた。もちろん驚いたが、一方で安心もした。

僕の知らないちひろを祐斗は知っていて、彼女は僕の知らない顔を彼に見せているのだろう。大切にしているから、と言った祐斗を僕は信じている。見た目とは違ってひどく不器用だけど、あいつは約束を破るような軽い人間じゃない。

僕にあつて祐斗にないものがあるとするれば、それもやっぱりちひろだ。彼の知らない彼女を僕は知っていて、誰にも見せない場所に隠して取つてある。

きらきらした思い出として。

05・瞼にキス（後書き）

本編のほうはまだしばらくつづきますが、「午後の陽だまり」はこれで完結です。

お読みくださった皆様、短い間でしたが、どうもありがとうございました。

ご感想などいただけたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596o/>

午後の陽だまり

2011年9月6日22時45分発行